

モノを通して幼児が「遊び込む姿」をめざす保育の在り方

A Study of Teachers Supporting Activities for Kindergarten's Children to Become Engrossed About Play by Making Use of "Objects"

塩見 弘子
Hiroko SHIOMI

滋賀大学教育学部附属幼稚園副園長

新関 伸也
Shinya NIIZEKI

滋賀大学教育学部教授・前附属幼稚園長

<キーワード> 幼児 モノ 遊び込む 育って欲しい姿

1. はじめに

中央教育審議委員会・答申にみられる「子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現する」¹⁾との改訂の方向性が示された。

これらを踏まえて学習指導要領では、子供たちが未来社会を切り開くための資質や能力を育成することが明確化され、「主体的・対話的で深い学び」のために、全ての教科において「①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理が行なわれた。

また、「幼稚園教育要領」の第1章総則では「教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境とのかかわり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」²⁾と記された。さらに、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」として、「(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現」の10項目が新たに示されている。

このような幼児教育政策と連動して、小学校入学当初からの生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実など、より小学校教育と幼児教育との学びの接続性や一貫性が求められている。こうした幼小連携の中で、幼児教育の「遊び」を中心とした保育の質的な保証は、以前にも増して求められている。

なお、本園の研究では、平成24年度から5年間にわたって「わくわくの創造」として研究主題を掲げ、継承しながら日常の保育活動の遊びとプロセスを重視した事例研究を重ねてきた。特に幼児を取り巻くモノや人との関わりが、成長を促すために必要な環境であると捉え、

幼児が遊び込めることを目標としている。

そのことは今回の改訂において「主体的・対話的で深い学び」の方向が明確に打ち出されていることから、本園教育のねらいである「のりだす・ゆきかう・みつめる」と相通じるものであると考える。

2. 研究の目的と方法

本園では幼児がモノとしっかり向き合い、遊び込むことで、資質能力が育つと考え、そのために教師はモノと向き合う幼児の姿から育ちを読み取る日常の保育が大切である考え、実践を積み重ねてきた。このモノについて、本園では幼児にとって有益で意味があり、幼児期にこそ出合わせたい「もの」を「モノ」と表記している。狭義には「素材、道具、自然物、生き物、など」で、広義には「幼児にとって意味のあるもの、幼児が主体として活動できるもの」としている³⁾。

また、「モノと向き合う」とは、園の環境の中で、そのモノに何かしら惹かれ、興味や関心を持った時であり、そのモノとの対話の中で幼児自身のもので取り込み、考えたり、繰り返したり、生かしたり、振り返ったりなど「遊び込む姿」となっている状態である。この夢中になっている幼児の姿こそが、望ましい遊びであり、深い学びに向かっている状態と捉えている。また、これらのモノを通じた遊びの中でこそ「主体的・対話的で深い学び」がその循環の中で生まれていると捉えている。

ここでは、遊びを通してどのようなモノに、どのように向き合うことが幼児の育ちにつながるのか明らかにするために、教師の幼児へのかかわりや支援の仕方を明らかにする。

そこで、幼児の「遊び込む」姿の事例を過去5年の中から選択し、その中で生まれている姿を読み取りつつ、3・4・5歳児それぞれにとって「モノと向き合う」環境の持つ意味を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁴⁾の視点から評価することで検証する。

3. 研究対象

平成25年度～平成30年度

滋賀大学教育学部附属幼稚園，3・4・5 歳児

4. 対象事例

3 歳児

■事例Ⅰ：平成 25 年 5 月「重たい！（砂場遊び）」

○幼児の姿

3 歳児は砂場での遊びにも慣れ、シャベルで砂を掬うのも上手になってきた。そこで、教師はたくさん砂が入られるようにと思ひ用具置き場にバケツを出しておいた。A 児はそのバケツ一杯に砂を入れ持ち上げると教師に「重たい！」と差し出した（図 1）。教師はそのバケツを受け取り「ほんと、重たい！」と答えると、A 児は満足そうな表情だった。

傍で見ていた B 児にそのバケツを「持ってみる？」と教師が言うと B 児が頷いたので渡した。B 児もそのバケツを持ち「重たい！」と言う（図 2）。そこで、教師は「B ちゃんもバケツいる？」と声をかけると頷いたので、バケツを渡すと、そばを通りかかった C 児に「C ちゃん、一緒にしよう！」と声をかけ、2 人ともバケツと手シャベルを持ち、砂を入れ出した（図 3）。

バケツ一杯砂が入ると B 児と C 児は「重たい！」と嬉しそうに教師に見せたので、教師もそのバケツを持って「重たい！」と答える（図 4）。傍にいた友達にも持ってもらって満足そうだった。



図 1 「重たいよ！」



図 2 「持たせて、本当だ」



図 3 「私もやろう！」



図 4 「先生、重いでしょ」

○モノと向き合う幼児の姿から

砂場は幼児にとって身近で分かりやすく取り掛かりやすい遊びの場である。砂はその感触も幼児にとって興味深く繰り返し遊べる素材で、砂場遊びはお気に入りの遊びとなっている。

用具として、まず幼児の手に合う手シャベルやカップなどを用意しておくことで、それを使って遊び出していた。繰り返し遊ぶことで用具の操作力も上達し、幼児自身で自在に使いこなせるようになってきている。教師はその姿を捉え、幼児にとっては大きいバケツを出すこと

で、よりやってみようという意欲につながった。

砂場、手シャベル、バケツという「モノ」と向き合う中で、傍に教師や友達がいることで、見守られている安心感のもとより、自分の発信を受け止めてもらえることで、自分の行為に確信がもてたり、友達同士影響し合う場になったりしている。

○幼児期の終わりまでに育てほしい姿の視点から

(2) 自立心

砂場が安心して過ごせる場になってきており、また手シャベルの扱いにも慣れてきている。自らやってみようとする姿が見られる。

(3) 協同性

発信しながら傍にそのことに共感してくれる教師や友達がいることを実感していたり、友達の発信に関心を持ってたりしている幼児の姿から、今後の協同の遊びにつながる姿と捉えられる。

(8) 数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚

手シャベルで砂を一杯入れたバケツを持ち「重たい！」と実感している。自分も同じ量を入れようと意識している。

(9) 言葉による伝え合い

やりたいという思いがしっかりと持てたことで友達に「一緒にしよう」と声をかけ、友達もそれに応えてくれている。

■事例Ⅱ：平成 25 年 11 月「ケーキができた（落ち葉）」

○幼児の姿

参観日に A 児は園庭でいつものお気に入りの段ボール電車に母親を乗せていた。桜の落ち葉がたくさんある場所で立ち止まり、段ボール電車から降りると、母親と傍にいた幼児と一緒にその段ボールの中に落ち葉を一杯入れ始めた（図 5）。A 児は一杯になったところで段ボールを取ると、集めた落ち葉が残り（図 6）「ケーキができた」とその場のみんなで歓声を上げた。



図 5 落ち葉を集めて



図 6 「ケーキができた！」

翌日もいつものように段ボール電車に乗って遊んでいたが、しばらくすると A 児が昨日のことを思い出して「ケーキを作ろう！」と段ボール電車を 3 個も持って教師のところに来た。教師はそれに応えて「しよう、しよう！どこがいいかなあ」と言いながら一緒に園庭を歩きイチョウの木の下に着いた。教師が「ここなら黄色いケーキができるね！」と言うと、A 児も「うん、そうしよう。これはこういう形で・・・」と持ってきた 3 つの段ボール電車をその場に置き、形を整えた。C 児と D 児も一緒にいたので、教師は A 児が昨日落ち葉でケーキを作ったこ

と、この箱の中に一杯落ち葉を入れるとケーキになることを伝えると2人も一緒に落ち葉を集め始めた(図7)。

ボールに白砂と水を入れてトロトロを作っていたB児がその様子を見にやってきて「味をつけま〜す」と落ち葉のケーキの中に白砂のトロトロをスプーンですくって入れ始めた(図8)。「たくさん入れすぎるとケーキ崩れちゃうから・・・」と言うと、加減を見ながら入っていた。D児が横から砂をパラパラと入れ「これチョコレート味やから」と言う。B児はその言葉を聞き「これ(白砂のトロトロ)はミルク味」と言う。



図7 落ち葉を集めて 図8 「味をつけま〜す」

イチヨウの箱がいっぱいになったので「もう一つは赤い葉っぱで作ろうか」と教師が提案すると、D児は以前していたように少し離れたところにある赤い落ち葉をバケツに集め何往復も運んで一杯にした。

赤い落ち葉がいっぱいになるとみんなで「いっせいのーでー」と箱を持ち上げ(図9)、「わぁー」と歓声を上げた。続いてイチヨウの箱も持ち上げ、2個のケーキが完成した。みんなでいつもしているように♪ハッピーバースデー〜と歌い、「ふー！」とろうそくを消す真似をして(図10)遊びを終えた。



図9 「いっせいのーでー」 図10 「ふー！」

○モノと向き合う姿から

ここでは、幼児にとっての意味のあるモノとして、赤いサクラの落ち葉、黄色いイチヨウの落ち葉、そして段ボール電車がある。段ボール電車はいつも園庭を散策する時に使用する“お気に入り”のモノであり、人や素材(落ち葉)をつなぐ契機となっている。

また、秋の季節ならではの落ち葉は、サクラは赤色、イチヨウは黄色と目を引くものである。幼児自身もそのモノに気付き、触れて遊び出すと同時に、教師自身もその美しさに感動し、こうしたいという思いを伝えている。

幼児がケーキをイメージしているのは、普通の遊びの中の砂などでご馳走を作り、いつも最後には幼児が集まり、作ったケーキを囲み誕生パーティーをしていた経験

から、特に言わなくても互いに通じ合っていたと推測できる。安心できる遊びや場に、幼児の感性を揺さぶる落ち葉に出合ったことで、人と人がつながる楽しい遊びとなっている。

○幼児期の終わりまでに育てほしい姿の視点から

(2) 自立心

落ち葉を一杯集めようとこれまでの経験からバケツを使ったり、友達がしているのを見て自分もやってみたりしながら、最後まで取り組んでいる。

(3) 協同性

友達の様子を見て、自分も一緒にやってみようと思ったり、一緒にやったりしながら友達同士で思いを共にしていく様子を感じられる。最後まで一緒に取り組んだことで、共に達成感を感じている。

(7) 自然との関わり・生命尊重

園庭いっぱい広がっているたくさんの赤や黄の落ち葉は、その場を共にする人たちの心に共感を生んでいる。自然の美しさに感動する体験は、人と共に感じることでより高まっている。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

段ボール一杯、たくさん集めるのにバケツに入れて何往復もするなど、落ち葉と段ボールとの関係性から数量を実感している姿がある。また、液状の白砂をかけるのも、幼児なりに量を加減している。

4歳児

■事例Ⅲ：平成28年6月「クリームください(泡遊び)」

○幼児の姿

教師は大きめの洗面器に水と石鹸を入れ「石鹸こするとどうなるかなあ」と幼児に声をかけると、女児が4人やってきた。しばらくそれを眺めていたので教師が「石鹸だよ。この中でこするとどうなるかなあ」ともう一度声をかけると、早速やりだしたが、なかなかうまく泡が出てこない(図11)。

しばらくすると、A児が手の平に石鹸を乗せてもう一方の手の平でこすり出した。教師は「そうすると、良く泡が出るの？」と声をかけると、A児は笑顔でうなずいた。それを聞いて、一緒にしていた幼児がA児のやり方を真似てやりだした(図12)。



図11 「泡を作ろう」 図12 「こうしたらいいよ」

隣の場で色水作りをしていたB児が泡づくりをしている女児の様子を見に来た(図13)。しばらくじっと見ているので「クリームみたいやね」と教師が声をかけるとB児はうなずき、興味がありそうなので「少しクリー

ム分けてもらう？」と教師が声をかける。B児は、うなずくが、一人では言えなかったので教師と一緒に「クリームください！」と言い、カップに1杯分けてもらうと、色水を作っていた場に戻り、自分の作った色水の上にクリーム(泡)を入れた。カップからそのまま入れたが、カップの底に泡が残るのでお玉を使って入れていた(図14)。



図13「何してるのかなあ」 図14「クリームもらって」

クリームソーダみたいになり、担任にそれをみてもらえてB児はうれしそうな表情を見せた。

女児たちは泡がどんどんできてきて、その泡をカップに入れて机に置き始めた(図15)。その様子に気が付いてC児もやってきてB児と同じように泡をもらいクリームソーダを作り出した(図16)。



図15「はい、どうぞ」 図16「クリームソーダができたよ」

○モノと向き合う姿から

教師は新しい遊びのきっかけとして石鹸を出してみた。石鹸と水で泡ができる。泡を作るという過程の中で思考、操作力が生まれたり、感触の心地よさを味わったりすることが予想できる。ここでは、どうしたら泡ができやすいか考え、A児の気付きが教師の言葉によって、他児に広がっている。

また、色水遊びの場は以前より継続して遊んでいる場でもある。遊びは熟練してきているが、変化を求めている様子も感じられたので、同じように水を使って遊ぶ場として、泡遊びをその隣に出したことで、関連性が生まれている。

遊ぶ場の設定と共に、より幼児が気付いたり、意識したりできるよう、教師のちょっとした声掛けも有効に働いている。

○幼児期の終わりまでに育てほしい姿の視点から

(2) 自立心

初めての行為には、直ぐには取り掛かりにくい、教師の声掛けであったり、一緒にする仲間がいたりすると、やってみようとする姿がある。徐々にできるようになる

と、もっとやってみようという姿になってくる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達の遊んでいる場を尊重して関わろうとする様子がある。欲しいものがあれば声をかけて了解を得ることが必要であることにも気付いている。具体的にどのようにすればいいか、その気持ちを汲んで教師が見本を示すこともある。

(6) 思考力の芽生え

どうしたら泡ができるか、実際にやりながら幼児なりに考えたり、友達の姿からヒントを得たりして考え、遊ぶ姿につながっている。

(10) 豊かな感性と表現

色水や泡から、イメージを持ったり、感触を楽しんだり、同じ場で遊びながら、それぞれが感じたり、そのものを使って遊びを広げている。

■事例Ⅳ：平成27年6月「長くなってきた(土粘土)」

○幼児の姿

初めての土粘土遊びである。A児は土粘土を手渡してもらい「めっちゃ重たい！」とうれしそうな表情をした。しばらく足で踏んで遊んだ後、平らになった粘土をくるくると巻いていき「長くなってきた」と言う。傍にいたB児がその声を聞き、同じように「長くなってきた」と言いながら長くしていくが、A児とはやり方が違い、少しずつぎったのをつなげていた(図17)。A児はもう1本作り、そばにいる教師に「長ーい、先生これ持ってみて」と比べている(図18)。



図17「長くなってきた」 図18 比べてみる

B児はどんどんつなげて長く伸ばしていった。すると、友達のお尻にぶつかってしまった。B児は「どいてくれない」と教師に訴えに行く(図19)。教師は「どうしたらいいかなあ」と言い、その場に寄り添っている。周りを見回していたB児(図20)は、急に「そうだ！あっちに伸ばそう」と友達のいない反対の方につなげていくことにした。



図19「どいてくれない」 図20「あっちに伸ばそう」

○モノと向き合う姿から

土粘土との初めての出会い。わくわく感をもって新しい素材と出合えるように大きな塊を手渡した。土粘土そのものと触れて遊ぶことが目的であるので、それぞれの幼児が触れて感じたこと、気付いたことに共感し、そこから遊びが広がるように教師は関わるようにしている。足で繰り返し踏んでいたら平らになり、それを「くるくる」手で転がしていたら長くなった。その発見が幼児にとって新鮮であった。友達の「長くなった！」の声を聞き、自分も長くしていくが、同じやり方ではない。

土粘土は、触った感触の良さと共に思うように形を作り、偶然になった形からも楽しめる。また友達の影響を受けながらも、幼児が自分のやりたいことを実現し、満足感を得ることのできる素材でもある。保育室一杯にシートを広げ裸足になって遊ぶことで、そばにいる友達の様子を取り入れながらも自分の発想で大胆に遊べている。

○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から

(1) 健康な心と体

保育室一杯にシートが敷かれ、教師も一緒に裸足になって存分に遊べる雰囲気から、新しい素材にも安心して取り組んでいる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達が邪魔で自分の思うようにできず困ったので教師に助けを求める。しかし、教師は困ったという気持ちは受け止め、待つことで相手に自分の気持ちを押し付けなくてもよい方法を考え出すことができている。

(6) 思考力の芽生え

土粘土という自由に形が変えられるという素材の持つ特性から、偶然性や友達の姿からヒントを得て、自分なりに考えて遊ぶ姿がみられる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

土粘土の重量感、自由に力加減で形が変わることから「平たい」「長い」を実感して感じ、比べたり、そこから遊びを広げたりしている。

[5歳児]

■事例Ⅴ：平成29年12月「立たせたい！（ツリーの木作り）」

○幼児の姿

幼児3人でクリスマスツリーを作ろうということになった。幹の部分は茶色の画用紙を丸めて作ったが、葉の部分をどうしようか考えている。緑色の紙を探すが小さいのしかなく、教師に4つ切の緑色画用紙をもらってきた。A児「それ切ったらいいんじゃない」B児「だれか切ってくれない？」A児とB児が半分に折り画用紙を支え、C児がその折り線を切る（図21）。半分に切れると幹の上に合わせてみる。どうしたら幹の上で安定するかいろいろとやってみる。C児「いいこと考えた。ちょっと貸して」と折り目を付ける。それを見てA児も折り目を付け、両端を幹の上で合わせる（図22）。B児がそこを持ち、A児がセロテープを持ってきて貼ろうとするがうまくいかず倒れてしまい、みんなで笑い合う。



図21 「ここを切って」



図22 両端を合わせる

「中、三角？」「いいね、立たなくない？」「ここに何か棒とか…」と言いながら、棒を持ってくるが長すぎて戻しに行く。また違う棒を持ってくるが上手いかず、「やっば、セロテープで止めた方がいいかな」と言う。机の上でやっていたのを床に降ろしてやってみたり、「先生に聞いてこようか」と言いつつ、3人で何とかしようとしていたりしている。丸い箱を土台に付けていた（図23）。

片付けの後に行ってみると、幹の上の緑の画用紙の三角の部分の中に2本の枝をクロスして貼り付けてあった（図24）



図23 何とかして立たせたい



図24 枝をクロスして

○モノと向き合う姿から

クリスマスツリーを作るという共通の目的をもって遊びに向かっている。5歳児のこの時期ならではの姿である。その中で、めあても「木を立たせたい！」という具体的なものである。

ここでは制作のために、使い慣れた画用紙を中心に、はさみとセロテープを使用している。今までの経験からその性質をよくわかって、試行錯誤しながら使っている。いろいろな材料も必要と思われるものは自分で選んで使えるようにしてあり、それ以外に必要なものがあれば、教師に自分から要求している。

画用紙で上手いかないと気付くと、棒を探してきて使っている。様々な場面でいろいろな材料を使ってきた経験から、自分たちで何がいいか考え選んだり、実際にやってみてみんなで確認したりしながら使う姿につながっている。

○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から

(1) 健康な心と体

充実感をもって自分のやりたいことに向かって取り組んでいる。仲間同士で具体的な共通のめあてがもてていることで、見通しをもち、自らやり遂げようという姿につながっている。

(3) 協同性

共通の目的をもつ、具体的にやりながら意見を出し合っていくことに充実感を感じている。協力の仕方、協力すると上手くいくということがわかっている。

(6) 思考力の芽生え

それぞれが今までいろいろな材料体験等を積み重ねているので、そこから友達の見解をヒントに自分の思考を深めている。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

「立たせたい」という共通の思いから、図形的にどのようにすればいいか、ある程度今までの経験からわかって進めている。

(9) 言葉による伝え合い

具体的なめあてがあるので、ある程度共通の思いで進めているが、細部については実際に作っていく過程で言葉を交わしながら共通化していっている。

5. おわりに

このように、幼児の「遊び込む」姿の事例を集積し、「モノと向き合う」環境の持つ意味、その中で育まれている姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で考察してきたことで、改めて3・4・5歳児と発達に応じた「モノ」との関係性、指導の在り方が見えてきた。年齢発達別に以下のようにまとめている。

3歳児 <モノとの出会い>

【視点】

- ・どのように教師がモノと出合わせるのか。
- ・豊かな表現、発想を引き出すための素材用具の精選
- ・教師の共感的な姿勢。

【環境】(素材用具の精選)

- ・多様性のある良質な素材の選定。
- ・幼児にとって手にしやすく力量、思いに合った用具
- ・慣れ親しむ時間が必要。
- ・使用を限定するような道具や教材の出し方はしない。

【援助】

- ・教師として願いや予測はもつが、幼児のモノとの出合い方についてわくわく感をもって観察する。
- ・幼児の発見に寄り添いつつ面白がる教師。
- ・幼児と同じ行為をやってみる教師。

4歳児 <モノとの対話>

【視点】

- ・モノに触れて遊ぶ中で、何を感じ表出しているか。
- ・モノと向き合いながら、モノの性質を知り遊びや表現にひろがっているか。
- ・安心して遊びが継続できる自分の居場所の設置。

【環境】(場づくり)

- ・今までの経験、使い慣れたモノ、身近な素材から興味をもち遊べる環境を作る。
- ・落ち着いて繰り返し遊べる場を設定する。
- ・友達や先生が感じ合える場
- ・幼児自身で自分たちの場を見つけ出し、作っていきける

雰囲気づくりをする。

【援助】

- ・それぞれの幼児の楽しみ方に目を向ける
- ・幼児の要求に応えながら、幼児が感じている楽しさを教師が共感する

5歳児 <新たな創造へ>

【視点】

- ・経験と友達(仲間)がキーワードになる。
- ・使い慣れた材料・用具、そこに新しいことが加わることで、興味や発想が広がり、遊びを作っていく楽しさが生まれる。
- ・それまでの幼児の経験に友達の姿や意見を取り入れ、思考や創造につながる。

【環境】

- ・幼児がめあてをもち、じっくりと取り組む時間と場の保障をする。
- ・材料や用具の使い方の経験を重ねていける場を提供する。
- ・自分のめあてに向けて材料・用具を選択できるよう必要な環境の準備をする。
- ・仲間と協同する場、必然性を創り出す。

【援助】

- ・幼児自ら考えていこうとする問いを見出す
- ・見通し、思考、協同、振り返りに向けて、意見の整理や友達同士の伝え合いの調整をする。

以上のように「モノに向き合い、遊び込む子ども」を主題に、実践事例を考察しながら保育を振り返ってきた。実践者としての立場で記述をしているため、幼児の姿について主観的な部分も多くなっているが、幼児に気持ちを寄せるからこそ実践者であるとも言える。今後も実践者の立場で、幼児の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、幼児の日々の姿から導き出していきたいと考えている。

【注】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」, 平成28年12月
- 2) 「第1 幼稚園教育の基本」『幼稚園教育要領(平成29年告示)』, フレーベル館, 2017年, p.5
- 3) 滋賀大学教育学部附属幼稚園『研究紀要2015』44号, 平成28年, p.3
- 4) 前掲書, 「幼稚園教育要領」(第1章第2), p.6